

親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

親鸞聖人のご生涯(6)

藤谷知道

再び京へ

聖人は62歳の頃、東国での20年にわたる布教に終わりを付けて京に帰られました。『顕浄土真実教行証文類』(『教行信証』)を完成させるためだったと思われます。親鸞聖人は生涯「非僧非俗」を立場とされ、お手紙類や仮名聖教には「愚禿親鸞」と署名されました。しかし『教行信証』には「愚禿釋親鸞」と「釋」の一字を入れていまして。「釋」の一字を入れることで、自らは釈尊の弟子であることを宣言し、あわせて、「浄土真宗」は日本の片隅に開いた一宗教では決してなく、時代を超え、所を越えて、すべての人に通じる「真実の仏教(真宗)」であることを証明されたのだと思います。

義なきを義とす

ところが、聖人が去った東

国では、月日が経つほどに、真実の信心にはほど遠い誤った考え(異義)が広がっていったのでした。

それというのも、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えは、聖人ご自身が「親鸞におきては、…よきひとのおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と告白されているように、その教えを生きる「よきひと」を信ずることを通して、はじめて信じていることができるものなのです。

ですから、よきひとが眼前からいなくなったとき、複雑なほど貴いと思うようになっていくのが人間の頭ですから、次第に念仏についての教義論争を始めていったのでした。

親鸞聖人はそれに対し「往生は、ともかくも凡夫のほからいにすべきことにてもそらわらず、…ただ願力にまかせてこそおわします」と諭し、他力にあつては「義なきを義とす」と繰り返かえされま

造悪無碍

こうした教義論争よりも、もっと深刻だったのが造悪無碍の異義でした。造悪無碍とは「煩惱具足の身なれば、こころにもまかせ、身にもすまじきことをもゆるし、口にもいうまじきことをもゆるし、こころにもおもうまじきことをもゆるして、いかにもこころのままにあるべし」と、煩惱を正当化し居直っていく考えです。こうした「造悪無碍」(何をしても差し支えなし)の考えは、「自我」にとつて自分を自由にしてくれる麻薬みたいなものではないでしょうか。「悪人正機」を説く専修念仏の教えのあるところ、造悪無碍の邪義は繰り返し巻き返し出てきます。

善鸞義絶

そうした中、京から、親鸞聖人の名代を自称する「善鸞」がやってきました。善鸞は親鸞聖人の子どもです。東国の弟子たちはきつと、善鸞に対

し、親鸞聖人に替わって自分たちを導いてくれると期待したことでしよう。

しかし、結果から言うと、そうではありませんでした。善鸞は「慈信(善鸞)一人に、よる親鸞がおしえた」と秘事法門をよそおい、こともあるうに「第十八の本願をば、しぼめるはなにとえ」て弥陀の本願をすてさせようとしたのでした。

親鸞聖人はそんな善鸞の行状をどんな思いで聞いたでしょうか。外から来る弾圧よりも、はるかにつらい、それこそ気も萎えてしまう出来事であったことでしょう。

「かえすがえすあわれにかなしうおぼえそうろう」とか「あさましくそうろう、あさましくそうろう」というお手紙からは、聖人のため息が聞こえてきそうです。

聖人は、わが子・善鸞を義絶したことを、門徒のみんなに宣言することになりました。それは聖人、最晩年の、84歳

よきことにてそうろう

しかし、ため息で終わらないうのが聖人です。「流罪」もまた「師教の恩致なり」と受け止め直されました。弾圧した人に対しても「念仏しらんひとをたすかれとおぼしめして、念仏しあわせたまうべくそうろう」と仰せになりました。今度は、この出来事を「よきことにてそうろう」と受け止め返されたのでした。

なぜなら、「慈信坊がもうすことによりて、ひとびとの日ごろの信のたじろきおう」たことは「ひとびとの信心のまことならぬこと」があらわになったのだから「よきことにてそうろう」と言いきったのです。

そして、なぜ、往生浄土の正因たる「真実信心」を獲得できず、造悪無碍の異義に走ったり、善鸞なんかの言葉に迷ってしまふのか、あらためて「信心」の中身について思索されていかれたのでした。

念仏生活を妙好人に学ぶ(9)
藤田ジャクリンさん



藤谷純子

ジャクリンさんはパリのセー

ヌ川にあるシテ島の歴史ある貴族の家に生まれました。どういうわけがあったのか、家は没落してしまいました。14歳の時から「自分とは何ですか、時とは何ですか」という問いを持って、先生方を尋ねたとも言います。

そしてその14歳の時に、日本の生け花展を見て、美しいとだけ言えない何か深い感動を覚えたそうです。その時に「生け花は仏教と関係があります」と聞いて、図書館へ行って思わず手に取ったのが薄くてポロポロな『歎異抄』だったそうです。

*

一日をかけて『歎異抄』を読ませていただいたあと、遠慮なく、楽しく笑ったことを今でもよく覚えております。親鸞様の

お家も、きつと、つぶれていたと感じました。また、親鸞様は貴族の心も、群萌のころもわかつておられるということが一瞬の間に見えてきました。親鸞様も、叱らずに笑っておられました。「ついてまいります」と親鸞様に申し上げたとたん、ジャクリンと名乗った「自分」について行く一本道でもありません。(藤田ジャクリン『ただの人』)

*

いつから修道院に入ったのか分かりませんが、キリスト教では地獄を畏れるのでしょうか、ジャクリンさんは『歎異抄』の「法然上人にだまされて地獄に落ちたとしても後悔しない」という親鸞様の言葉にびっくりしたそうです。それで修道院を出て、いろいろなアルバイトをしながら貧しいアパート暮らしをしたのでした。

親鸞様のいらっしゃる日本に行くために貯金をして、21歳の時に、汽車に乗ってベルギー、東ドイツ、ポーランド、モスクワ、次に船に乗って、とうとう日本についたのです。横浜に

着いて、指紋を採られ在日外国人となつて、海を渡った移住者の心を知ったそうです。そういう扱いを受けても、親鸞様はやさしく「法を聞きなされや」と仰せられましたのでさみしくありませんでした。横浜の土を踏んで娘は「親鸞様に私の骨を持ってきました」と自分にささやきました。

(藤田ジャクリン『旅の人』)

*

これが確か21歳の時です。以来、一心一身に一本道を歩んでゆかれました。たぶん私と同じ歳くらいではないでしょうか。蓮如上人のお言葉に「一度の誓いが一期の誓いなり。一度のたしなみが一期のたしなみなり」とあります。そのことを証してくださっているジャクリンさんの生き様だと思います。

*

町内から回覧板が回ってきましたが、ご縁の草取りの日に、都会育ちの嫁は何が花で、何が草かよく分からなくて、ツツジを少し抜き取りました。若い奥さんは「外国人は馬鹿

ね」と怒りました。嫁は「はい、馬鹿です、南無阿弥陀仏」と笑いながら頷きました。その時ふと思いました。お念仏がなければ、自分は「馬鹿」であつたことを、こんなに素直に認められなかつたでしょう。謝らなければならぬときは、心の底でまづ一声南無阿弥陀仏を称えれば、「はい、ごめんなさい、悪かった」という言葉はもつと素直に出てきます。(同)

*

毎晩必ず小さなノートにお名号を写させていただきました。いつか何かが起こるかも知れないと思いました。如来さまとの出会いはきつと特別の素晴らしき出会いだと信じこんでいました。一年、三年、ずつとお名号を写させていただきましたが、何も起こりませんでした。お念仏お婆ちゃんに黙っていましたが、突然いやになりました。お念仏はしばらくやめようと思いましたが、一晩お名号を写しませんでした。

「今日はやめた」と自分に言いました。南無阿弥陀仏が聞

こえて参りました。頭が下がりました。「やめたくてもお念仏はやめません。本当に生かされているのですね」とうなずかれました。心は笑いました。ご本願様は明るいのです。その日からは、何かが起こっても起こらなくても、どうでもよいことになりました。(同)

*

人は人に飽きます。物に飽きます。自分に飽きますが、お念仏を一生称えても南無阿弥陀仏に飽きません。一声一声は如来さまとの初出会い、我との初出会い。おじいさんおばあさんになつても、いつまでも、これからは。親鸞様の若さも大切なみ教えです。開法の集まりが、もつと若い気持ちでいて欲しいとは、親鸞様のみこころです。(同)

*

ジャクリンさんの一心一身の歩みのみずみずしさ、優しさ：を学ばせていただきました。ありがとうございました。お許しもえずに引用して、ごめんください。